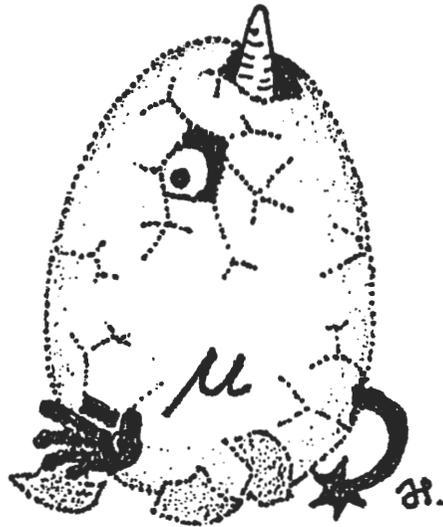


日本生物學會誌

第 28 号



日本生物學會

1991年 7月31日

第 28 号 も く じ

半 仙 半 魚	: 偏見と独断 (10) 「天才サル」	1041
栗 間 修 平	: わが「案病」記	1043
筆 不 精	: ワープロ礼賛	1061
公 家	: 仏陀生物学	1064
公 家	: 仏陀生物学 (2)	1067
?	: 時事放談	1070
生物学誇大事典: じえいたい		1076
編集者への手紙		1077
編集局だより		1082
編 集 後 記		1083
会 計 報 告		1084

「 天 才 サ ル 」

半 仙 半 魚

私の店に来た親子の会話。

親：オイ、サルがワープロできるらしいよ。子：ワーッ、プロ！ 親：バカ！ 冗談言うな。お前もいっしょうけんめい勉強せんと、サルに負けるぞ。(店主つまり私：私はサル以下か —— 私はワープロができない、やりたくない)

サルが鍵三か所も開けて逃げたかどうかは疑わしいが、鍵を自分で開けて逃げたからといって、「天才サル逃げる」とマスコミが騒ぐほどのこともあるまい。〔話が大変古くて申しわけありませんが、これはひとえに生物学会誌の発行がおくれたためです — 会長〕近ごろはやたらとペット的な動物が、人間と同じような事(形だけ)をやると、やたらと喜ぶ傾向があるみたいだ。そして、てきの悪い人間をして「サルでもできるのに」と、その人間をバカにする。人間にしても、その動物にしても、迷惑な話である。今回のサルは人間にたとえれば、三才児ほどの能力(知能)を持っている天才サルだという。今回のサルはどうか知らないが、自然界に生きるサルなら、三才にもなるものなら、自分の生きていく(餌を探がし、生活していく)能力があるだろう。人間の三才児など足許にも及ばないだろうに。

ワープロを使いこなそうが、人間の言葉の意味を解せようが、すばらしい動物の能力とは、私には思えない。鍵を開けて逃げれるくらいなら、山に逃げこんで、あっさり麻醉銃などに撃たれてつかまったりするな。せめて山の中に逃げこんで、自分(サル)をいじめた人間を、あのランボーみたいに(ちょっと乱暴な話だが)やっつけてほしいものだ。〔そういうサルがいたら、まよわずFさんという名前をつけるね〕

私の仕事場(養魚場)は山の中にあり、よく野良犬の群れが出没し、村の人に危害を

与えそうなので、役所から麻酔銃を持って捕獲にくるが、それで野良犬がつかまったためしがない。犬の方は、声ひとつ立てずどこかへさっさと退却して、簡単には犬死しない。役所の人間の手に負える代物ではない。

私が小学校4～5年のころ、田んぼのまん中に学校があり、登校の途中よく麦畑にガンが降りており、それを鉄砲射ちがよくねらっていた。ガンはよく知っていて、私達子供が近づいても警戒しないが、鉄砲射ちが近づく、遠くから察知して、さっさと飛び去ってしまう。それでよく、鉄砲射ちが私達小学生の登校の列に加わり、ガンの目をごまかそうとして、見るからにこわそうなオジサンが背中をかがめ、私の帽子をかぶり、何年何組の私の学生服と、どこかの怖い組のものと思われる変な制服ととりかえ、必死に近づこうとしていたが、見張りのガンに見破られ、発砲の記憶は一度もない。

私もワナをかけたが、かかったことはなかった。ガンもまた、鉄砲射ちや私達子供の手にも負える代物ではなかった。もっとも、中にはドジなガンもいて、田んぼのすみにあった古いコエダメに足をとられ、臭い死に方をしたのもいたそうな。

シートンの動物記やガンじいさんの話など、動物と人間との寸々発止のやりとりが面白いのであって、三才児くらいのできる事(?)などやったところで、それほど感心する事ではないだろう。

物(餌・金)で釣って、さほど興味のない事でもやらせようとする人間社会、その概念の中にくみ込まれてしまった元野生動物と真の野生動物とは、はっきりちがいがあろう。我が家の純粋な雑種の犬も、餌に釣られて番犬になっていると思う。イルカショウのイルカだって、子供を少しは楽しませている。ただ、オオカミ王ロボのように、最後まで餌で釣られることのなかったものに対しては、それが例え作り話であったとしても、何か野生動物に対するあこがれみたいなものを、子供心に感じたものだ。

まずい危険なバナナはもう飽きた。経済大国の日本ならメロンくらい食べさせろ。ウサギ小屋の住宅なんかに住めるか。有名校の受験生みたいに勉強々々で疲れ切って、むしゃくしゃして逃げ出したのだろうか。

いずれにしても天才ザル故に、逃げ出して子供に噛みついて、その事自体さほど問題にならない。これが野良犬なら「すぐ撃ち殺してしまえ」となるだろう。いかに日本のお裁きである。天才と何とかとは、紙(嘘)一重、という所か。

わが“楽病”記

栗間 修平

〔1〕発病—入院

一昨年（1989年）秋の職場の定期健康診断の折、私の肺に異常なものが出来ているのが発見された。左肺の上部に五百円玉を一回り大きくしたような影が、レントゲン写真にくっきりと映っていた。

その定期健診のある約1ヵ月前、私は珍しく風邪をこじらせた。丁度、兄が上京していた時だった。ゴホンゴホン咳き込む私を見て、兄は「お前の咳はちょっと異常だな。気管支をやられているんじゃないのか？」と言った。「大丈夫だよ。風邪だよ。そのうちに治るさ。」

私はとりあわなかった。2～3日休めば良くなると思っていた。実際、2～3日休んだら、微熱や鼻みずという風邪の症状は治まった。しかし、咳だけは抜けなかった。

激しく咳き込むことこそ無くなったが、時々咳が出る。そのうちに、咳をすると左の胸にちょっと痛みを覚えるようになった。私は人間が繊細に出来ているのか、いろいろなことにすぐに胸を痛める性分である。日本はバブル経済とかで浮かれていたが、その年六月には中国では天安門事件が起こり、秋には東ヨーロッパで激動が続いていた。そんなこともあって胸が痛むのだろうかとも考えたが、咳をした時に感じる胸の痛さは、どうもちょっと違うような痛みだった。

健診を受けた数日後、その健診機関から呼び出しがかかり、今度はX線の直接撮影を受けた。その写真にも白い影がくっきりと映っている。その写真を見ながら、その医者は言った。

「君の肺にはハレモノが出来ているようだ。紹介状を書くから、一度専門医に見て貰った方がいい。」

ハレモノか何かはわからないが、肺に何か影になるものが映っていることは素人の私にもわかる。

「何か映ってますね。一体、何でしょうかね？」

その医者は私の質問には答えず、その写真を持って専門医の所に行けと言った。

翌日、私はその写真を携えて紹介された駿河台にある病院を訪れた。そのKという医師が「専門医」だそうだ。Kセンセイはその写真を見ておもむろに頷いて、言った。

「これは切った方がいいな。」

「専門医」に「切れ」と言われたら切るしかないだろうが、私の肺に出来ているハレモノが何なのか？それは切らなければ消えないものなのか？私は怖ず怖ずと聞いた。

「あの一、その影は一体何なんですか？」

Kセンセイはまた鷹揚に頷いて答えた。

「これだけじゃ、はっきりしない。断層写真を撮って来なさい。そしたら、この影が何かもう少しはっきりするだろう。」

私は言われるままに断層写真を撮り、それをKセンセイの所へ持って行った。Kセンセイはそれを見て、

「うん、やはり切った方がいい。いや、切らなきゃならん。今切れば、絶対に良くなる。それは保証出来る。」

自信タップリに答えた。私はまた怖ず怖ずと聞いた。

「あの一、何のピョーキなんでしょうか？」

Kセンセイは、私が手術を受けるのを怖がっていると思ったようだった。

「心配、いらんよ。私は、君のような患者を何人も治している。私は自信を持って、君の身体を治せる、と言える。」

「あの一、切るのかまいませんけど、一体、何のピョーキなのか……？」

Kセンセイは暫く考えていたが、意を決したように写真を見ながら言った。

「いろいろと検査をしないとわからないが、これは悪性のものの疑いが強い。結核とかだったら、この影がこちらまで侵食して来ないことが多い。大体ここで止まって、この部分が真白になる筈だ。しかし、君のはここまで来ている。これは悪性のものの可能性が高い。これは切らなきゃ、命取りになる。」

左の肺は上下二つに別れている。私の肺に出来ている影はその上部に出来ているが、ほんのちょっとだけ下部の方にもかかっていた。Kセンセイの話は、左肺の上部に部分的に出来た影が下部にまでかかるのは悪性即ち癌の可能性が高いということだった。

「あの一、悪性と言ったら、癌なんですか？」

「いや、まだはっきりはしてないが……。まっ、その親戚だと思って貰った方がいい。しかし、君は若いんだから、今切れば絶対に治る。私は断言してもいい。」

私の肺に出来ている影が癌によるものであるなら、切除手術を受けるしかないだろう。切るということにはためらいは無かったが、同じ手術を受けるなら東京の病院ではなく、郷里の病院で手術を受けたいと私は思った。私の場合、東京には「身寄り」という者がいない。そんな所で「死ぬかもしれない」病気の手術を受けたくはなかった。私は怖ず怖ずと申し出た。

「あの一、すみませんが、郷里に帰って手術を受けたいと思いますが……」

「何？郷里？君の故郷はどこだ？」

「はい、島根県ですけど。」

「何？島根？駄目だ、駄目だ。島根みたいな田舎じゃ、治るものも治らん。悪いことは言わん。設備もスタッフも整っているここで切った方がいい。」

そのKセンセイの言い草が私には気に入らなかった。そりゃ、島根県は田舎でしょうよ。しかし、島根にだって病院もあれば医者もいる。Kセンセイは頻りに「君の命は一つしかない」という言葉を持ち出して、私をその病院に入院させようとした。しかし私はガンとして聞き入れなかった。そして粘りに粘って、島根の病院宛ての「紹介状」を書いて貰った。

Kセンセイは余程キッタハツタが好きなので、「紹介状」を私に渡す時まで、「残念だな。私が切れれば君は必ず良くなるのに……」と言っていた。

さて、郷里に帰って治療するという事に決めたものの、いろいろと「後始末」がある。私の郷里での入院生活がどの位の期間になるのか予測出来ない。私が東京の下町で借りている家は、とりあえずはそのままにしておくとしても、私が留守の間の家の様子を時々誰かに見ておいて貰わねばならない。さしあたって必要な物は持って帰るが、それ以外に急に必要な物も出て来るかもしれない。それを誰かに送って貰わねばならない。

そんな頼みをする為に、私は友人の一人に電話をかけた。

「ちょっと頼みたいことがあるけど……。あまり良い話じゃないが、会った時詳しく話すから、一度家まで来て貰えないか？」

私が電話をした相手は、同じ区内にある無認可保育園の保母さんだった。彼女は、私の頼みとは一体何だろうと思った。もしかしたら、私がどこかに子供を作り、その子供を彼女の働く保育園で預かって欲しいという依頼なのかもしれない。そんな想像まで働かしたそうだ。私にはそんな甲斐性はなくて、ゴメンナサイ。

私は彼女に頼むべきことは頼んだが、彼女の口から私が癌だという噂が周囲に広まった。噂というものは必ず大きくなって広がるもので、「クリマが死にかかっている」という話を聞いた者もいるらしい。とにかく、あいつをこのまま死なせるのは惜しくはないが可哀相だということで、私の「壮行会」を行なうということになった。私の壮行会は、飲屋一軒を借り切って20人近い友人達が集まって、飲みや歌えやで催された。その時私は気付かなかったのだが、集まった面々の中には、それが私との今生の別れだと考えていた者も多数いたようだ。

そんなこんなで私は郷里の島根県松江市に帰った。松江のどこの病院に入るかは、医者をしている後輩や松江にいる姉達と相談して決めていた。

私が行った先は国立療養所松江病院という所だった。レントゲン写真を一枚撮り、翌日から入院ということが決まった。

病院に入れば、酒は飲めなくなる。煙草は吸えなくなる。せめて、若くて可愛い看護婦さんがいて欲しい。それ以外に楽しみは無い。入院が決まった時、私はそう思った。

〔2〕五病棟

私は国立療養所松江病院第五病棟の入院患者になった。

病院の受付で入院の手続きを済ますと、五病棟から看護婦が迎えに来た。これが若くて結構可愛い。「ほれ、しめた。これは幸先良い。」私は思わずにっこりした。彼女に病棟まで案内され、私はそこの9号室の住人になった。

9号室は6人部屋で、肝硬変・胃潰瘍・喘息等それぞれ異なる病気を抱えた患者が入っていた。着替えをして暫くすると、別の看護婦が呼びに来た。その看護婦がまた、最初の看護婦と甲乙付けがたい別嬪だった。また、つい私はにっこりとしてしまった。彼女に看護婦詰め所へ連れて行かれ、病歴や家族構成や仕事のこと等いろいろ聞かれた。私は彼女の顔をうっとり眺めながら、何一つ「黙秘」することなく喋った。

「煙草は、一日何本くらい吸ってましたか？」

「はっ、はい。30本くらいは吸ってました。」

病棟の規則には「煙草は厳禁です」と書いてあった。ところが、彼女は妙なことを言った。

「もし煙草を吸われる時には、そこの廊下を右に折れた所に空缶が置いてありますので、そこか、もしくは玄関の横の喫煙所へ行って吸って下さい。病棟では絶対に吸わないで下さい。」

えっ、煙草を吸ってもいいの？厳禁じゃないの？私はそう思ったが、その疑問は口には出さなかった。この際禁煙しようと思ったばかりである。吸ってもいいようなことを言われてすぐに煙草に飛び付くようでは、いつまでたっても禁煙など出来ないだろう。

さて、病棟生活であるが、朝は六時半起床。朝食を摂った後、午前八時半から十時半までは安静時間。昼食後、一時半から三時半までまた安静時間。夕方五時頃に夕食になり、九時には消灯。その繰り返しだった。

五病棟の患者は、圧倒的に爺さん婆さんが多い。全体で約50床あるのだが、その幾つかの部屋は寝たきりの老人が占めていた。寝たきりでなくても、3～4年入院生活を続けているという人も珍しくはなかった。

私が入院した丁度その日、向かいの部屋から一人の爺さんが引っ越して来た。その「引っ越し荷物」の多いこと。私に付き添って来ていた母と姉も啞然とした表情でその「引っ越し」を見つめていた。その爺さん、もう4年もその病院にいたりとか……。医者からはいつ退院してもいいと言われていたらしかったが、ずるずるとそこで暮らし続けていた。その爺さんは、私が入院して20日も経った頃、突然退院して行った。結構ワガママな爺さんで、看護婦達からは嫌われていた。その爺さんが「退院する」と言った時、それを聞いた看護婦が思わず口にした言葉は「今日は大安吉日だわ」だった。ちなみに、その日は「仏滅」だった。

私の隣には、身の丈1 m80cmはあろうかというひよろ長い男が寝ていた。年は50才前。高校時代は野球部のエースとして甲子園をめざし、その後はノン・プロのチームに属していたこともあるらしいが、酒で身体を壊し、もう15年近くあちらこちらの病院を渡り歩いているそうだ。聞くところによると、一晩で1升の酒を飲むような生活を続けていたそうで、肝臓を悪くしない方が不思議である。その人も、12月の初めに退院した。その人の退院が決まった時、婦長がやって来て、彼に言った。

「Mさん、退院したら、散歩くらいしないと駄目だよ。」

それに応えて彼の言った言葉は、「恐くて、道なんか歩けんわね」だった。

私はそのやりとりを笑いながら聞いていたが、約4ヵ月後私が退院した時、彼の言っていた「道を歩く恐さ」を私も感じた。暫く娯楽を離れていると、車のスピードや道を歩いている人の動きが掴みにくくなっていた。

私が五病棟9号室にいたのは約1ヵ月だった。その間に何人もの患者が出たり入ったりした。「夜逃げ」した爺さんもいた。その爺さん、私が入院するよりも前からその病室に入っていたのだが、「外泊届け」を出して、荷物をまとめて帰って行った。そして、そのまま病院には戻って来なかった。

私が入院して10日ばかり経った頃、Nという銀行員が9号室に入院して来た。彼は私より3～4才若い患者だった。レントゲン写真では肺が真っ白になっているとのことだったが、10日もすればその影が跡形もなく消え、私が手術の為に一病棟に移される頃に、元気に退院して行った。五病棟では、私と彼だけが比較的若い患者で、しかも他の爺さん婆さんに比べたら元気が良かった。飯を食うのも、どうしても他人より速くなる。他の患者がやっと食べ始めた頃に、二人だけ飯を食い終つてゐることもしばしばだった。

「あんたら、ちゃんと、噛んで食べてるかね？味わって食べなきゃ駄目だよ。」

ある看護婦が言った。

「味わって食うような飯か！」

私は言い返した。しかし、病院の飯は不味いとは言うものの、その病院の食事は思っていたよりは質のいいものだった。

後日談だが、一旦退院したNは10日も経たないうちに、また同じ病室に舞い戻って来たようだ。年が明けた頃、私は病院の中を歩いていて、Nとばったり出会った。彼はバツが悪そうに「出戻りだよ」と言った。そしてその後、彼は3月初めまで入院生活を続けることになった。

私はすぐにでも手術を受けるつもりで入院したのだが、その病院の医者は手術の手の字もなかなか言い出さなかった。検査も、たて続けに受けるのではなく、今日一つ、明日一つ、といった具合だった。そして、とにかく切ろうということになったのは、入院してから20日も経った頃だった。

私の担当医はNという女医だった。彼女は私にいろいろな検査をしたのだが、私の肺

に出来ている影が何に起因するものなのか、判断を下じかねていた。もちろん、彼女も私が癌に冒されているという疑いは持ったようだったが……。

キツイ検査は3度ばかり体験させられた。うち2度は内視鏡による検査だった。原理は胃カメラと同じだが、カメラが食道から胃に入るのではなく、気管から肺に入っていく。検査室の中で、N女医と病棟の看護婦と検査室の看護婦、女3人に押えつけられて抵抗の術もなく喘いでいる私の姿など、あまり想像して欲しくないものだ。それを2度までやられてしまった。おかげで、検査室の看護婦とも顔見知りになった。彼女は、手術のある日には手術室に詰め、それ以外の日には検査室にいるというキッタハツタ押えつけるというのが得意な看護婦のようだった。

「クリマシユウヘイってカッコいいじゃない。映画俳優か作家の名前みたいで……。」

彼女がそう言ったので、私は涼しい顔をして言い返した。

「名前ばかりじゃないよ。本人の容姿はもっとカッコいいと、本人が思ってるんだから。本人を見てカッコいいと思ってくれなきゃ……」

しかし、その本人はつい数分前までは女3人に押えつけられて見るも哀れな姿で喘いでいた。

もう一つキツイと思った検査は、背中から注射針をグサリと刺された時だった。まず検査室に連れて行かれ、X線で私の胸を映し出す。横にテレビの受像機のような物があって、そこに私の肺が映っている。N女医はポケットからマジック・インクを取り出し、その受像機を見ながら私の背中に印をつけた。その後病棟の処置室に戻り、それからが「地獄」だった。上半身裸で椅子に腰掛け、背中に局部麻酔を施された。そして、マジック・インクの印の付いているあたりにグサリと針を刺された。これは、注射をするのではなく、逆に肺の中の組織あるいは菌を取り出して調べる為のものだった。背中には麻酔が効いており、また肺には神経が無いそうで、痛みはあまり感じなかったが、針が身体の中に入って行く時の衝撃はあった。脂汗がタラリタラリと流れた。一人の看護婦が私の前に立ち、私が暴れないように私の肩を押えている。あまりのきつさに、その看護婦の腰にしがみつきたくもなった。幸か不幸か、その時私の肩を押えている看護婦はオバさんだった。私の自制心が働いてしまった。もし若い看護婦だったら、私はためらうことなく、彼女の腰に抱きついていただろう。私の横には皿が置いてあり、使い終わった血塗れの注射針がそこに投げ込まれる。その針は7～8cmはある長いものである。3～4本取った後、女医と看護婦が話し合っている。

「もう少し長いので、後2～3回取った方がいいわね。」

「じゃあ、これにします？それともこっち？」

思わず、私は振り向いて見たくなった。私が恐々首を回すと、看護婦が言った。

「クリマさん、見ん方がえでね！」

この「えでね」というのは出雲弁で「いいよ」という意味である。しかし、私は見てしまった。彼女が用意していたのは10cmいや15cmはあろうかという長い注射針だった。

病院での生活は、概ね暇だった。特に、夕食後の時間は長く感じれた。本を読んだりテレビを見たりして過ごすのだが、それでも退屈であることには変わりがない。

一階にコーヒーの自動販売機が置いてある。そこでコーヒーを買い、待合室のロビーでそれをゆっくりと飲む。そして、20分でも30分でも時間を潰す。それが夕刻の私の日課になった。

私が一人でコーヒーを飲んでいる時、よく顔を合わせる一団がいた。彼等はいつも4～5人連れで、比較的若い男達だった。年嵩で私と同年輩、若いのは20才前後。彼等は、結核患者だった。彼等も暇をもてあましているのか、夕刻になるといつもそこに姿を見せ、私同様にコーヒーを飲んだり、あるいは煙草を吸ったりしていた。何度も顔を合わせるのので、そのうちに挨拶も交わせば、話もするようになった。おかげで、いい暇潰しになったが、そのうちの何人かとは退院するまで付き合うことになろうとは、その時私は思いもしていなかった。

私を担当しているN女医は私に抗生物質の注射をして様子を見ることにした。その抗生物質が効けば、もしかしたら私は手術を受けずにすむかもしれない。入院した時にはすぐにでも手術を受けるつもりでいたのだが、切らずにすむかもしれないという可能性が出てくると、だんだんと手術を受けたくないという気持ちが強くなっていった。

しかし、抗生物質の注射にもかかわらず、私の肺に映る影は小さくならなかった。結局、私は手術を受けることになった。

私が手術を受ける為に一病棟に移ることが決まった時、五病棟の看護婦の一人が私を励ますように言った。

「クリマさん、一病棟に移るんだって？あそこは良いわよ。ピチピチ・ギャルが沢山いるから……」

一病棟というのは、その病院にある唯一の外科病棟で、これから手術を受ける患者及び手術の終わった患者が入っている。私は手術に対する不安とピチピチ・ギャルに対する期待を胸に、五病棟から一病棟へと引っ越して行った。

〔3〕一病棟

一病棟は、手術前後の患者が多いということもあって、いつも慌ただしかった。看護婦達がしょっちゅう飛び回っていた。

私が入られた病室はまたもや9号室。五病棟と同じ6人部屋だった。病棟全体のベッド数は約50。これも五病棟と同じだったが、本来4人部屋のうちの2つが“集中治療室”に改造されていた。

9号室の住人は、私を除くと既に手術を終えた人達だった。全員年配者だったが、そのうちの3人は私と同じく肺の手術を受けていた。彼等の体験談を聞いていると、私の手術に対する不安も幾分は和らいだ。

病棟での生活パターンは五病棟の時と基本的に変わりはないが、一病棟では「安静時間」というものが決められてはいなかった。しかし、毎日、医師の回診及び術後患者のガーゼ交換等があり、その時間には必ず病室にいなければならない。

さて、私期待のピチピチ・ギャルであるが、一病棟の看護婦は相対的に若い人が多かった。患者の動きは激しくはないが、その症状の動きは激しい。それに応えて、看護婦達はいつも飛び回らなければならない。そんなこともあって、比較的若い看護婦が多数配置されているのだろう。私が一病棟に移った頃には、その若い看護婦に加えて附属の看護学校の学生達が一病棟で実習を受けていた。おかげで、その学生達が検温や脈拍測定に来るのもしばしばだった。学生が私の脈拍数を数えている時、つい話しかけて、彼女を混乱させてしまったこともある。

「俺の脈拍、今日はいつもより早くはないか？」

「えっ、普通ですけど……」

「いや、あんたに手を握られたら、心臓がときめき出して。だから、脈拍も早くなってるんじゃないかと……」

「もう！変なことを言うから、数を忘れちゃったじゃない！」

しかし、ギャルを相手にしていて楽しいことばかりではない。ギャルに痛い目にあわされたこともある。手術を受ける数日前だったが、ツベルクリン注射をされた。この注射は皮の中に注射する。針を肉まで刺し込んではいならない。横に看護婦が控えてはいたが、注射をしたのは実習中の学生だった。彼女は幾分緊張気味だった。しかしそれでもうまく皮内に針を刺しこんだ。そこまでは満点だった。ところが、彼女は緊張のあまり余計な所に力が入ってしまった。うまく刺しこんだ筈の針が私の皮膚を破って外に飛び出した。

「イテェー！」「ゴメンナサーイ！」

気を取り直して、彼女はもう一度挑戦した。今度はうまくいった。私は彼女を宥めるように優しく言った。

「あの、俺は、顔は特にそうだけど、皮が全体的に薄いんだよ。俺みたいに皮の薄い人に注射する時には、気を付けなさいね。」

脇にいた看護婦がけたたましく笑い出した。

私の手術は12月21日に行なわれた。私が、その病院でのその年最後の手術患者ということになった。

手術の数日前、手術についての細かな説明を受けた。私の肺に生じているものが何なのか？カビなのか、何かの菌なのか、それとも癌細胞なのか？いろいろな検査にもかか

わらず決め手となるものは無く、抗生物質も効かなかった。結局、開けてみるしかないということで、手術に踏み切る。手術時間は大体3時間。執刀には二人の医師があたる。万全を期すが、人のすることなので失敗ということもある。大体、そんな話だった。

「失敗ということもある」という医者言葉に、奇妙なことだが、私は彼への信頼を感じた。東京の病院のKセンセイは「絶対に治す」と断言した。そのKセンセイの言葉は彼の自信と患者を安心させる為に発せられたものだっただろうが、私は彼の言葉に何か傲慢さを感じていた。

手術は午前10時半頃に始まった。寝台車に乗せられ、手術室に運ばれて行った。もう切るなり突くなりしろという心境だった。手術室に入ると、間もなく麻酔をかけられ、その後のことは何もわからない。ただ、検査室で顔見知りになった看護婦がいて、「シュウハイさん、とうとうここへ来たわね。」と言い、それに対して私は何か憎まれ口の一つを叩いたような気がする。

気が付いた時には、“集中治療室”になっている病室に運ばれていた。後で、ある看護婦から聞いたのだが、手術が終って病棟の看護婦が手術室まで私を迎えに行き、「クリマさん、病棟へ帰るよ。」と話しかけたら、私は頷き、一言「痛いわ」と言ったそうである。

私の手術は当初予定されていた3時間の約半分、1時間半程で終了したらしい。胸を開けてみた結果、私の肺に生じていた影は癌によるものではなく、結核菌の固まりによるものだったということがわかった。切り取った部分がどんなものだったのか、私は見ていないが、姉二人は医者からそれを見せて貰ったそうである。白いプヨプヨしたものだったそうだ。

術後の回復は、私は人並みはずれて早かった。手術の2日後には抜管し、3日後にはもう歩いていた。最初は寝返り一つうつことも出来なかった。だが、昨夜出来なかったことが翌朝には出来るようになっていて、午前中無理だったことが午後には難無く出来るようになる。自分で自分を観察していても、面白かった。しかし、最初のうちは、痛み止めの座薬を入れるのまで、看護婦の手を煩わさねばならなかった。座薬を入れて貰う為に若い看護婦に汚い尻を突き出す度に、あいすまないという気持ちがあった。そのすまない気持ちをどう表現したらいいのか、考えた末に、私はある看護婦に言った。

「すみませんね。あんたが座薬を必要とした時には、是非俺を呼んでくれよな。俺が入れてあげるからね。」

そしたら、その看護婦は何故か私の尻をベシッと叩いた。

肺の一部を切り取るというちょっと大きな手術を受けた後に、多少は私の人格にも変化が生まれるのではないかと期待していたが、今のところ人格の変化は感じられない。

手術の3日後、12月24日の朝、私は手術後初めて病室を出て、トイレまで歩いて行っ

た。いつもと同じような調子で病棟の廊下を歩いている私の姿を見て、看護婦がびっくりしていた。その日の午後、X線撮影を受けることになった。X線撮影室は、病室から100m近く離れている。看護婦は私に聞いた。

「車椅子で行く？それとも歩いて行ってみる？」

私は歩いて行くことにした。看護婦が付き添ってはいたが、X線撮影室までの距離は私には苦行ではなかった。その往復を歩いてみて、かなり自信のようなものが湧いて来た。その日、手術後初めて新聞とテレビを見た。ルーマニアで流血の「革命」が起きていた。それから間もなく、私は“集中治療室”から大部屋に戻された。今度は、以前にいた9号室の隣の8号室だった。8号室も6人部屋だった。

術後の回復は良好だったが、病院で年を越すことになった。症状の軽い患者は次々と退院して行った。退院出来ないまでも、正月を家で迎える為に外泊許可を取って帰宅した患者も多かった。その病院では、各病棟に小さな食堂があり、症状の軽い患者は食堂で食事をするようになっていた。私は術後数日間は部屋に食事を運んで貰っていたが、その後は食堂に出て他の患者と一緒に食事するようになっていた。ところが、食堂に出れるような患者は次々と退院もしくは外泊で帰宅して行く。結局、年末年始には食堂で食事するのは私一人になった。

私の病気は結核だった。もし、結核でなかったなら、1月中旬には私も退院出来ただろう。しかし、結核であるということで、暫く結核病棟に「隔離」されることになった。国立療養所松江病院というのは、その名が示すように、元々は結核患者の療養所として作られていた。しかし、結核患者の減少にともなって、現在では一般の病院へと様変わりしている。とは言うものの、“療養所”であることには変わりがなく、3つの結核病棟が存在している。

1月半ば過ぎ、私はその結核病棟の一つである九病棟に移ることになった。

私は、五病棟にいた頃から、九病棟にいる若い患者達とは顔見知りになっていた。九病棟の様子は彼等からいろいろと聞いていた。

「一病棟には若い看護婦さんがいっぱいおられるでしょう？いいねえ。九病棟には、独身の看護婦なんておらんでね。」

そんな話を私は彼等から聞かされていた。今度はピチピチ・ギャルに対する期待など持てない。しかも行先は“隔離病棟”である。

私は、一病棟の婦長に送られて九病棟へと移って行った。

〔4〕九病棟

私の今度の住まいは九病棟13号室だった。九病棟全体のベッド数も約50。しかし、半

分近いベッドが空いていた。13号室は定員4人だったが、私が入った時には、数日後に退院が決まっている爺さんが一人いただけだった。

九病棟は、一応“隔離病棟”ということで、他の病棟には無い規則がいろいろと決められていた。病棟からやたらに外へ出てはならないとか、散歩範囲はここまででその先には行ってはならないとか、外へ出る時にはマスクをしろとか……。しかし、その規則は概ね守られていなかった。

私は、その病院に入院して間もない頃から、運動の為に散歩するように心掛けていた。病院の敷地は広大で、病院の建物のまわりを一周するだけで30分近くかかる。九病棟に移ったからと言って、その散歩を“自粛”する気にはならなかった。制限された散歩区域を大きく逸脱した散歩を続けた。無論、マスクなど着用しなかった。そんな“規則違反”に対しては、余程目に余るもの以外は看護婦達も見ても見ぬふりをしていた。しかし、実際には守られてもいないタテマエだけの規則であっても、規則があるということ自体が多少の心理的プレッシャーにはなる。私も、散歩している時などに、ふと「今ボクは、してはいけないことをしているのではないか？」などと思ったこともあった。

九病棟に移って間もない頃、九病棟の婦長が、
「何か不便に思っていることがあったら、何でも言って下さいね。」と私に言った。私はすかさず答えた。

「ここに来て、不便に感じたことは二つある。一つは、妙な規則があるということ。散歩区域を制限する等ということは、実際には何の意味も無いのではないか？もう一つは、若くてきれいな看護婦がここにはいないこと。以上。」

そしたら婦長は言った。

「若くもなくて、きれいでもなくて、悪かったわね！」

私はあわてて言い直した。

「今のは、『若い看護婦がいない』と訂正する。きれいな看護婦さんはいらっしやいます。特に、心のきれいな看護婦さんが沢山いらっしやって、満足しています。」

九病棟は“隔離病棟”であり、私はそこに“隔離”された患者になった。“隔離”の実態がどういうものなのか、多少は知っていたので、“隔離”されることへの心理的抵抗は殆ど無かった。しかし、「隔離する」という言葉を聞いて夜も眠れなくなった者もいた。

Yというその患者は、私と同年輩。私が五病棟にいた頃から顔見知りになっていた結核患者だった。郡部にある鉄工所に勤めていた彼は、出雲市の島根医大病院で“じん肺”の健診を受け、その時に結核にかかっているのがわかったらしい。医大の医者は彼に、「Yさん、あんた結核だ。松江にある療養所に“隔離”しなきゃならん。」と言った。それを聞いて、彼はその夜眠れなかったそうだ。えらいことになった、家中消毒されるのではないか、鍵のかかった病室に入れられるのではないか……。翌日、彼は国立療養

所松江病院へやって来た。来てみたら、玄関のあたりの様子は普通の病院と変わりがない。少しは安心したものの、病棟に入るまで「隔離」への恐怖に彼は怯えていたようだ。しかし、彼の入った病室にも鍵などかかっていなくて、やっと安心した。

私はYの話の笑い話として聞いていたのだが、しかし何の予備知識も無く「隔離する」という言葉を聞かされたら、Yのような反応も異常ではないかもしれない。

九病棟に移ってから暫くの間、私は“張り合い”をなくしていた。私が“張り合い”を感じなかったのは、九病棟には若い看護婦がいないからではなかった。そもそも、私は病気を治す為に病院に入ったのであって、看護婦の尻を追いまわす為に病院に入ったのではない。後述するけど、私が入院している間、むしろ看護婦に私が尻を追いまわされていた。一病棟でもその気配はあったが、九病棟では特にそうだった。

九病棟に移ってから私が“張り合い”を失ったのは、療養の“目的”みたいなものを私が掴みかねたからである。五病棟にいた時は、検査を受けて私の病気が何なのかを明らかにするという“目的”があった。一病棟では、手術を受けて治すという“目的”があった。しかし、九病棟では……？

私の場合、悪い部分は手術によって切り取り、後には何も残っていない筈だ。実際に、肺の影は消えたとし、痰や血液の検査をしても、何一つ悪い兆候は無い。だとしたら、何故そこに入院していなければならないのか？私は担当のN女医に、その疑問をぶつけてみた。彼女の答えは「再発予防の為」ということだった。そして彼女は言った。

「今、外は寒いんだから、暖かくなる頃まで、ここにいなさいよ。癌でなかっただけでも助かったと思って、ここでのんびりしなさいよ。」

すぐに退院して一日でも早く仕事に戻りたいという気持ちは、私は初めから持ち合わせていない。「のんびりすること」が九病棟での私の“目的”であるなら、いくらでものんびりさせて貰いましょう。幸いなことに、結核予防法なる法律によって、私の医療費はタダ同然である（月額3千円ちょっと）。そんなお金で3食昼寝付き、多少は女つ気ありの生活が送れるなら、それは優雅を通り越しているのではなかろうか。私の心にまた“張り合い”が甦った。

九病棟での私の治療といえば、薬を飲むこと以外には週2回のストレプトマイシンの注射だけだった。

私はこの注射を尻に打たれていた。この注射は結構痛くて、私は打たれる度に悲鳴を上げた。私の悲鳴を嬉しそうに聞きながら、看護婦は私の尻に注射針を突き立てる。看護婦の前に尻を曝け出すと、注射針が突き立てられる前から、尻に力が入る。

「ちょっと！尻の力を抜いて……。これじゃ、針が刺さらないわよ。」

看護婦はベシッと私の尻を叩く。いつもやられ放しだと頼なので、一度言い返したことがある。

「いや、尻の力を抜くと尻が出そうで……」

「やめてよ！私に向って尻などしたらタダじゃおかないからね。あんたのはいかにも臭そうだからね。」

「すみませんね。何しろ、親から貰った名前がシュウヘ（臭尻）だもので……。」

注射の度に私が悲鳴を上げるものだから、看護婦も楽しんでいた模様だ。注射の日には、どの看護婦も嬉しそうに私の病室に入ってくる。

「さあ、クリマさん、注射だよ。逃げようたって駄目よ！」

私は思わず両手で尻を押える。

「さあ、尻を出して……。恥ずかしがるようなトシじゃないでしょ！」

「いや、昨夜、吉永小百合が夢の中に出て来て、彼女以外の女性には俺の尻を見せてはいけないと言ったもので、今日は……」

「あら、この前は、昔別れた恋人が夢の中に出て来て、同じことを言ったんじゃないやなかった？今度は、吉永小百合？次は誰が夢の中に出て来るのかね？」

「さあ？誰かな？しかし、ここの看護婦じゃないってことだけは、確かだな。」

「とにかく、つべこべ言わずに、さっさと尻を出しなさいよ！」

私は観念して尻を出す。看護婦は嬉しそうに注射針を私の尻に突き立てる。私は悲鳴を上げる。いつも、そんな光景が繰り広げられた。

ストレプトマイシン、略してSMだそうだ。よく言ったものだ。しかし、何度注射されても、私は最後まで痛さが快感に変わる心境には立ち至らなかつた。

一病棟には20人近くの看護婦がいた。それに比し、九病棟の看護婦は、婦長以下9人。一病棟の約半分の人数である。いずれも、30代から50代のベテラン看護婦だった。

九病棟の結核患者は、比較的軽い症状の者達である。私もそうであったが、自分が病気だという自覚を持たない者も多かった。患者の容体が急変することなど滅多に無く、一病棟のように病室から病室へと看護婦が飛び回る必要は無い。だから、比較的小人数の看護婦の配置で何とか間にあっているのだろう。しかも、病人だという自覚を欠いて“規則違反”を繰り返す患者に睨みを効かすには、若い看護婦ではいささか役不足である。“オバタリアン”であつてこそ、「元気」な患者に「言うことを聞かす」ことも出来る。そんなこともあつて、若い看護婦ではなくベテランが配置されているのだろう。

九病棟では“オバタリアン”が患者への睨みを効かしていたが、それでもその雰囲気は和気霽々としたものだった。おかげで、私も楽しく“張り合い”のある療養生活を送ることが出来た。いつも笑いにはことを欠かなかつた。笑い話の一つを紹介しよう。

ある日、病棟の黒板に「浴場に大切な物が落ちていました。詰め所で保管していますので、心当たりの方は、詰め所まで取りに来て下さい」と書かれてあつた。私は首を捻つた。風呂には裸で入る。それで、何を落とすというのだ？

その頃同室だったTという若い患者に、私は語りかけた。

「おい、風呂場に落ちていた大切な物って、ありゃ何だ？風呂にはすっ裸で入るだろう。それで落す物って、人体の一部であるとしたか考えられないぞ。お前、何が落ちていたと思う？まさか、〇〇を落した人がいるのではなからうな？」

彼は生真面目に答えた。

「そんな……。それじゃ、歩く時にバランスが崩れるんじゃないですか？この病棟に、そんな人、います？」

そこへ看護婦が入って来た。

「おお、丁度良かった。今、彼と話し合ってたんだけど、風呂場に落ちていた大切な物って、何？本当に大切な物なの？」

私が聞くと、看護婦は「そうよ。とても大切な物だよ。」と答えた。私は言った。「そうか、じゃあ、やはり“あれ”だ。裸になって落した大切な物って“あれ”しか考えられない。“あれ”であればこそ、看護婦さんもその物ズバリの名称を黒板に書き入れるのに気恥ずかしさを覚え、“大切な物”という意味深長な表現をしてるんだ。」

「しかし、それじゃバランスが狂いますよ。」

Tが納得しないので、私はもう一度看護婦に聞いた。

「念を押すけど、その落し物って、普通は二つペアになっている物でしょ？」

看護婦は頷いた。さすがにベテラン看護婦は、私とTが何を話題にしているのか、気付いた。そして、ちょっと顔を赤らめ、大笑いしながら言った。

「もう、ヤダッー、あんた、変なものを考えてるでしょ？それで、クリマさんは大丈夫なの？落してはいないでしょうね？」

「うん、大丈夫。俺も心配になったから確かめてみたけど、落してない。しかし、落し主が恥ずかしがって名乗り出ないかもしれないから、黒板には『恥ずかしがらずに勇気を出して取りに来て下さい』と書き加えておいた方がいいと思うよ。」

そのやりとりは、看護婦の勤務交替の時の「申し送り事項」にもなっていたらしく、翌朝、別の看護婦が私の部屋にやって来て、私の顔を見るとニカッと笑って言った。

「クリマさん、例の物の落し主が現われたわよ。」

「えっ、誰？」

「それは教えれない。プライバシーの秘密だもの。でも、やはり二つ無いと不便だったらしいよ。バランスも悪かったみたいね。」

「ふーん、やはり俺が推理した通りだったか。しかし、誰の物か知らないけど、結構臭かったんじゃないの？」

「臭いわよ。あまり臭いんで、私、洗ってあげたわよ。そしたら光り輝くようになったわよ。クリマさんも、落さないように気を付けなさいよ。」

ちなみに、風呂場に落ちていた「大切な物」とは、靴下の片方だったそうだ。先の〇〇には、人体の一部を表す漢字2文字が入る。

少々文章の品位が落ちたので、ここで立て直しておこう。

国立療養所松江病院の病棟は2階建てであり、九病棟の建物は1階が八病棟、2階が九病棟になっている。私が最初に入った五病棟は2階で、1階は三病棟、主としてリュウマチや神経痛の老人達が入っていた。手術を受けた一病棟は1階で、その2階は二病棟だった。二病棟は五病棟と同じく一般内科の病棟である。病院の真ん中を突き抜けて“中央廊下”が走っており、その左右に幾棟かの2階建ての病棟が広がっている。九病棟の建物は、その一番奥、“中央廊下”が通称“桧山”と呼ばれる裏山に突き当たるすぐ手前に建っている。

私の病室の窓の外は、“桧山”の雑木林だった。そこにはいろいろな鳥が飛んで来る。私は双眼鏡を取り寄せて、バード・ウォッチングを楽しむことにした。スズメ・カラス・ヒヨドリ・ツグミは言うに及ばず、ウグイス・アカゲラ・コゲラ・エナガ・ヤマガラ・ホオジロ……etc.

病院の周囲を散歩している時にも、いろいろな鳥を観察することが出来た。丁度私の病室の窓の下あたりから“桧山”の中をぬう散歩道が作ってあった。これは本来、八病棟に入院している子供達の為の散歩道だった。八病棟は、喘息や小児マヒの子供達の入っている小児病棟で、その子達は病院に隣接して建っている県立養護学校にその病棟から通っていた。その散歩道には、規則上は結核患者は立ち入ってはならなかったが、私はそんな規則など無視して、天気の良い日には毎日のようにそこに足を踏み入れ、山道の散歩を楽しんだ。小鳥もいる。森林浴も出来る。

ある日、その山道を歩いていて、私は狸と出会った。

病院の裏山には狸が棲んでいて、時々病棟の近くにも姿を見せる、という話は私も聞いていた。しかし、その実物を見たのはそれが最初だった。私が狸を見たという話を聞いて、その夜、Yがパンを持って私の部屋にやって来た。パンの欠けらを下に投げておけば、それを食べに狸がやって来るかもしれないとYは言う。そしてYは、持って来たパンを千切って投げた。Yの投げたパンの欠けらは、病棟と“桧山”の間の道路に散らばっていた。1時間ばかり過ぎた頃、私は何気なく窓の外を覗いて見た。路上に撒き散らされていた筈のパンの欠けらは、跡形もなく無くなっていた。狸がやって来て、それを食べたに違いない。しかしその時は、狸の姿を見ることは出来なかった。

翌夜、また同じことを試みた。そして、暫くの間、窓の外を窺っていると、雑木林の中から狸が姿を現わし、撒き散らされているパンの欠けらを食べ始めた。その夜以降、毎晩のように、病棟の裏に狸が姿を見せるようになった。

昼はバード・ウォッチング、夜は狸の観察と、私は極めて日本生物学会員らしい療養生活を送っていたのであった。

私の退院の日が近付いた3月のある日、病院の待合室の近くを歩いていた私は一人の

女性に声をかけられた。

「あら、クリマさんじゃない？」

振り向くと、「見知らぬ」子連れのおバさんが立っていた。

「今は苗字が変わってるけど、Sです。小学校の時、同級だった……」

名前を聞いて私も思い出したが、チラッと見ただけでは、それがSさんだとは私は気付きもしなかった。

「よく、俺だって、わかったね？」

「そりゃ、わかるわよ。昔の面影そのままの顔をしてるんだもの……」

懐かしくはあったが、少々複雑な気もしないではなかった。私の顔は、子供の時からあまり変わっていないのか……？喜ぶべきか、悲しむべきか？

手術を受けた後も人格に変化は無かったということは、前に書いた。しかし、手術後に眼に見えて変わったものもある。それは髪の毛だ。手術を受けた後、急に白髪が増え始めた。私も最初のうちは白くなった髪が気になったが、そのうちに“ロマンス・グレー”も悪くないと思直すようになった。これからは“中年の渋さ”を売り物にしようかと考えた。しかし、ガキの頃の顔つきそのままじゃ、せつかくの“ロマンス・グレー”も渋さを出せないのではなかろうか？

〔5〕退院—社会復帰

3月18日、私は4ヵ月を越す入院生活にピリオドを打ち、無事退院することが出来た。そして4月中頃、職場にも戻った。

万事がのんびりしていた松江の病院の生活から何もかも慌ただしい東京の生活に戻ると、何か“異世界”に投げ込まれたような感じさえた。

最後に、医療にかかわる問題を二つだけ書いておきたい。

一つは、癌の“告知”の問題である。私の病気は実際には癌ではなかったのだが、私は一旦は癌の“告知”を受けた。癌だと告げられた時、どんな気持ちでしたか？後になって、友人達からも看護婦からも、その時の私の気持ちを何度か聞かれた。恐らくショックだったのだろう、と彼等は思っているらしかった。確かに、ショックを受けなかった訳ではない。しかし、私の場合、他人が想像している程には強いショックを感じなかった。もしかしたら死ぬかもしれない、この先長くないかもしれない。頭の中で考えるとそんなことも思い浮かんだが、それは実感を伴ったものではなかった。だから、深刻になつたりすることなく、いつも笑っていることが出来た。

癌を患者に告知することの是非は、いろいろと議論されている。どちらが良いとも言い難い。しかし、自分がその患者を切りたいばかりに、ろくな検査もしないうちから癌

と決めてかかけ、それを患者に“告知”するというのは問題だと思う。

手術も終り、病院の中を自由に歩き回れるようになった私と出会った五病棟の看護婦達は、会う人毎に私に「良かったね」と言った。彼女達は、東京のKセンセイの「紹介状」もあったので、私が癌に冒されているという疑いを強く持っていたようだ。だから、手術の結果、癌でないことがわかって「良かったね」という言葉になった。

国立療養所松江病院を退院した私は、暫く薬だけは飲み続けなければならないということで、駿河台のKセンセイのいる病院に通うように指示された。

「ろくに調べもせず俺の病気を癌だと言ったような奴の所には行きたくない」と私は言ったのだが、とにかく書類はKセンセイの所に回された。

約5ヵ月ぶりに会ったKセンセイは横柄だった。

「薬が欲しいということですね。松江の病院からも書類が来てます。いいですよ。薬は出しますよ。」

自分の「診たて違い」については一言も無かった。私は彼に「詫びて欲しい」とは思わないし、そんなことを言う立場でもないと思っている。しかし、「癌でなかったみたいだな。良かったな」位の言葉が出ても良さそうだとは思った。しかし、そんな言葉は彼の口からは聞けなかった。

幸い、Kセンセイは開業するというのでその病院を辞めることになっていた。だから、退院後Kセンセイに診て貰ったのは1度だけだった。Kセンセイの後をHという医師が引き継いだ。その時妙なことが起きている。松江の病院から駿河台の病院に送られた手紙が紛失していた。その手紙に何が書かれていたのかは知らないが、松江の病院の封筒に入った手紙が私のカルテに挿まれているのは、私も見ている。Kセンセイも「松江の病院から書類が来ている」という言葉を口にした。ところが、H医師が私のカルテを開いてみたら、その手紙はなくなっていた。おかげでH医師は、私の手術の経緯等を改めて松江の病院に問い合わせたようだ。そして、改めて送り直された手紙が私のカルテに差し込まれた。

しかし、最初の手紙はどうなったのだろうか？そこには何が書かれていたのだろうか？もしかしたらKセンセイの「診たて違い」が指摘されていたのではないか？詮索したい気持ちだ。

二つ目は、看護婦不足の問題である。看護婦不足の問題は、現在深刻な社会問題であるらしい。私のいた病院は国立病院ということもあってか、ある程度の看護婦は確保されていたようだ。しかし、それでも、その数は“目一杯”ではないのだろうか。もう少し看護婦の数が多ければ、彼女達の仕事ももう少し楽になるだろうにと思ったことは何度もある。

私の病院での生活は、“闘病”と言うよりは“楽病”とでも言った方がいいようなものだった。実際、私は周囲の心配をよそに入院生活を楽ませて貰ったような気がして

いる。しかし、その私の“楽病”も心優しい多くの看護婦達がいるこそ可能になったものだった。もし看護婦の数がもっと少なくて、ただ忙しく働き働いているだけという状態だったら、私の入院生活も恐らく索漠としたものになったに違いない。

私が入っていた病院でも、「増員要求」を掲げて労組が病院の玄関に座り込んだことがある。顔見知りの看護婦が何人もそこに座り込んでいた。その脇を通りかかった私は、その座込みに引摺り込まれた。

「クリマさん、あんたも座りなさいよ。どうせ暇なんでしょ？」

「どう？九病棟は面白い？」

「面白いものか！ケツに針を刺されて泣いてるよ。」

「その位、我慢しなさいよ。それとも、また一病棟に戻って、どこか切って貰う？」

「この人、一病棟に戻すから、今度は舌を切ってやってよ。そしたら、口の悪いのも少しは治るでしょうから……」

「いや、それは困る。俺は、どこかの誰かと違って、一枚しか舌を持っていないから、それを切られたら困る。」

その場に座り込んだ私はそんな馬鹿話をして看護婦達を笑わせていたが、その時座り込んでいた看護婦達の要求は切実なものだったと思う。

私の“楽病”の日々から1年の月日が流れようとしている。今でも、時々、私は懐かしく思い出す。あの病院の佇まい、私の散歩道、世話になった医師や看護婦達、療友達、そして狸……。おかげで、私は元気になりました。そして今も大いに世にはばかって生きています。

【 完 】

ワープロ礼賛

筆不精

突然ですが、ワープロなるものを買ってしまいましたので、物書きの巣窟日本生物学会にて、その素晴らしさを報告することにしました。

まず、よく言われる特徴を挙げると、この機械を使用するとどんな人でもきれいな字で文章を書けます。また、語を入れ替えるのが簡単なので、文章の推敲が楽になり、紙の浪費が減少します。前者は、幼少のころから「字が汚い」と言われ続け、心中密かにコンプレックスを抱いてきた人々にとって、大きな福音となりましたが、習慣的に大量の酒精を摂取している作家や学者にとっても大きな福音だと言われています。もちろんキーボードの練習を怠れば、たちまちにして平仮名すらまともには入力できない状態に陥り、逆にあまりキーボードに慣れ親しむと、鉛筆の持ち方さえ危うくなる、という事実は文明の利器が導入される際にいつも生じる、ささやかな犠牲に過ぎません。そして文章の推敲に関しては（その名の示すとおり、これこそがワープロの本領なのですが）、まことに便利と言う外はなく、殊に、一般向けとして発売された初期の機種では、表示できる文字数が極端に少なく（30文字×2行程度）、どこに何を書いておいたか自分で覚えておき、しかも編集後に印刷した結果を予測する能力を養うという、非常に人間的な配慮がなされていました。表向きは、この設計思想は捨て去られつつあるようですが、実際に使ってみると、私が今回購入した機械の中にも今なお脈々と息づいており、設計者の良心に触れたような気がします。もちろん、この設計思想を受け継ぐ限り、常に執筆者の意図からはずれる印字結果がもたらされる危険性があり、したがってあまり紙の消費は減少しない事になります。しかし、これはいつも白紙を用いようとするからいけない訳で、一度使用した紙や広告の裏を用いるなどして節約すれば良いことです。あくまでも使用者の心掛けの問題といえます。

それ以外の利点は数限りなくありますが、ここでは私が実感したものをいくつか挙げることにします。

1. 知らない漢字を書けること。単に自分では知らない漢字だけでなく、誰も知らなかったような当て字を書くことができます。また、漢字を覚える手間が省けるのでその分の記憶能力を、別のことにまわすことができます。その余分な記憶能力を何に使うかは個人の自由ですが、しばしば操作を覚えることに使われることになります。きわめてむだのない使用法と言えます。

2. 多機能であること。これは近ごろのワープロの特徴らしいのですが、あまりに機能が多くて、しかもそれぞれ独特の操作を必要とするため、いやでも説明書を読みながら操作せざるを得ないようにできています。そして、それらの機能がほとんど必用ないものであるという事実は、この多機能性が、明らかに説明書を読まずに電気製品を使用しようとする、日本人の悪しき習慣を正そうと意図されたものであることを示唆しています。こんなところにも配慮して、あえてむだの多い製品を作らなければいけないメーカーの嘆きがきこえてくるようです。

3. 場所をとること。これはすべての機種に共通する訳ではありませんが、特に据え置き型の機械はかさばるため、普通は一箇所に置いて用います。したがって、なにか文章を書こうと思ったときに、いちいち机の上を片付けたり、机がわりになる平面を求めて、筆記用具を手にもさまようことがなくなります。非常に横着な話ですが、実をいえばこれこそがワープロの最大の利点であるとも言えます。なぜならば、文明の利器というものは横着をするために考案されるのが常だからです。ワープロのこの利点があまりに正面に押し出されないのは大変不思議なことだと思います。尤も、トイレクリーナーや糸楊枝や電気掃除機のC.Fのように、わざわざ実物よりも汚いものを登場させてまでその効果を宣伝することはよくありますから、信じられないほど物が積み上げられて用をなさなくなった机とか、その机の主である生物学者だとかがでてくるC.Fも、そのうち登場するかも知れません。

4. 学会誌発行の手間が少なくなること。これもまた、あまり一般的なことではないのですが、日本生物学会の学会誌に投稿する際にワープロを用いると、わざわざ原稿をタイプで打ち直してもらう必要がなくなります。また、これによって当用漢字（今は「常用漢字」という。なんでも文部省はその昔、漢字を全廃するつもりで「当面の用に供する」という意味で「当用」としていたとかいう話。その後「漢字かな混じり文の良さがだんだんに判明してきた」のだそうで、どうやら私が小学生の時分はまだ「判明して」いなかったらしい）も使用できるようになり、原稿中にいつの間にか混入するくゝを避けること

ができるという効果もあるようです。ただしその反面、原稿のおもしろみが半減することも少なくないので、ただ利点ばかりとも言えません。

5. 日本経済に貢献すること。 パソコンには負けますが、ワープロ市場もまた消耗品や機能増加のための付属品であふれかえています。しかも、ワープロというのは買ったとたんに別の機種が欲しくなるように設計されており、その効果があまりにも高いのには目をみはるものがあります。あるいはスイッチを入れたとたんに、識読下に動きかけるメッセージが表示されるプログラムが潜ませてあるとか、何か裏があるのかもしれませんが。その証拠に、メーカー側は、これでもか、これでもかと半年ごとに新製品を発表し続けています。つまり、これだけ高額の商品をどんどん買ってもらえるめどがある、ということです。そうなると多少の問題はでてきますが、電気製品と自動車で成り立っている国の経済を積極的に支える為には、やむをえないかも知れません。しかもこの電気製品は、日本語で操作するようにに特殊化していますから、間違っても外国の市場を食い荒らしたりしないという点で安心であり、国際的なセンスからみてもすばらしい商品といえます。(ただし一部の製品はむやみに海外へ持ち出すとCOCOM規制にひっかかるそうです?)

この他にも、長い文章を印字するにはページが変わるたびに紙を一枚ずつセットしてやる必要があるという根気を養うための機能や、一箇所間違えたら全部印字をやり直さないと気が済まなくなる、という完璧さを養う性質などがありますが、あまり羅列すると「切手収集」とか言われてしまいそうなので、このへんにしておきましょう。とにかくワープロというのはこのように素晴らしい機械なのです。と言っても、読んだだけでは納得できないでしょうから、まずは試してみることをお勧めします。もちろん説明書がなければ操作できないように細心の注意を払って設計されていますし、ちょっとやそとでは使い切れないことが最初から分かっている機能も満載していますから、ゆめゆめ店頭で用事が済んでしまうなどとは考えないでください。理想的には自分で一台購入することです。当然、半年以上前の旧型など買うべきではないでしょう。どこがどうなのかよく分かりませんが、新製品は絶対に優れています。うそだと思ったら、店の人にきいてみてください。きっと同じ答えが返ってきます。さあ皆さん、いますぐワープロを買いに行きましょう。そして知的生産にはげみましょう。

ほーっほっほっほっ まろはピーターソンではないぞよ。ピーターソンとゆえば トヨタ二千GTが思い出されるのお、またベンベ（ビーエムではないぞよ）もあったの一。「ユーたちどーして外国の車ばかり乗りたがる、ミーはトヨタ二千GTよ」なんーてこといっておったの一。いやはや 実におもしろいやつておじゃった。【会長には何のことかわからないぞー 5. 2局長】【わからんでもええわいー 会長】 さて今日話すのは ほかではないぞよ。と その前に大切なことをわすれておった。みんな良い子にしておったかの。まろは息災ちゃ。この一言が大切なのちゃ。さてはは仏陀ちゃ、仏陀。まろは仏陀が大好きちゃぞ。また荘子やら老子も好きだぞよ。しーたけはきらいちゃ。【毛虫も、ちゃろー 5. 4局長】 あれは この世にあってはならんものちゃ。わかったら 身の周りにしーたけなるものを近づけてはならぬぞ。食うなどもってのほかちゃ。仏陀がなせ死んだか 知っておるかの。きのこを食ってあたって死んだのちゃ。それゆえしーたけはいかんのちゃ。【仏陀にあこがれている君は、しーたけ食ってあたって死ねば、本望ちゃないのかねー 会長】【さすが会長奥が深いー 5. 1局長】 ほーっほっほっほっ まろはピーターソンちゃないぞよ。もちろん白鳥麗子でもないぞよ。でもまろは白鳥麗子が好きだぞよ。彼女は実に愛らしい。このあたりでまろは 実はうっけてではないかと思ふふとどきなやからがでてきたのを まろは感じるぞよ。【それで！ー 5. 2局長】 まろは決してうっけてではないぞよ。【それで！ー 5. 2局長】 なにせまろは教養ゆたかな殿上人にあらせられるからの ほーっほっほっほっ。【5. 1局長：会長、 “教養 ”って何でしたっけ。会長：よくわかってる事をわけのわからんように言うことや。5. 1局長：うーん、奥が深い】 それではこのへんでまろの教養をちらりとかいま見せるかの。【気持フルーイー 5局長一同マイナス5. 3局長プラス会長】 ほーっほっほっほ。【著者の名誉のために一言つけ加えておきますが、日常彼はこんな笑い方をいつもしているわけではありません。言ってる内容は、常人とやや異なりますがー 会長】

仏 陀 進 化 論

どーちゃ、この題名を。まろはちゃんと進化論を知っておるのちゃぞ。されどこの進化論はたいしたことはないの一。後々 うんぬんいわれるよーうちゃまろは認めんぞ。どーいうふー

に進化する、大進化やら小進化、ばたまた中の上中の並中の下進化なぞどーでも良いのちゃ。

{この部分は、会長著「さかな陸に上る」第10章 進化の原則 に出ていることです

5. 1局長 } こんなものはうっけ生物学者にお似合なのちゃ。まろはもっと本質をもとめるぞ。なにゆえに進化するか。またなにゆえに進化せねばならぬか。進化をひきおこす原因はなにか。なに、そんなことはもう知ってる、論じられてわかっておる。そこが甘いのちゃ。あんなもん全部うそっぱちちゃ。{お前、全部知ってたのか? — 5. 2局長 } {知らんでもうそであることはわかるんちゃ — 著者 } {欄外で勝手にケンカするな — 会長 } ほれ題名をも一度ちくと見りゃれ。頭の上に何がついておるかの。仏陀ちゃ仏陀。仏陀は眞実のみ語るぞよ。仏陀はこのように申されておる。「世間における一切のものは無常であり虚妄である」どーちゃ うっけ生物学者がいくら何を言ってもむだなのちゃ。またこうも申されておるぞよ。「比丘たちよ 目における目の対象は無常である 無常なるものに我は存在するであろうか」

「世尊よ 無常なるものに我は存在しません」

「それゆえ比丘たちよ 目における目の対象は無常であると知って 執着してはならない」

{こんなこと言うてるわりには、自動二輪の限定解除に執着して、何べんも試験受けに行ってたなあ — 5. 4局長 }

どーちゃ 唯物論者ども、事実と思っていることは実はそうではないのちゃ。さてはて本題にもどるぞよ。本題とはなんちゃったかの。そうちゃ、進化を引きおこすものは何か ちゃ。仏陀によって 目に見えるものは虚妄ちゃとわかったのう。すなわち 現象として現われるもんぢゃないのちゃ。現象として現われないもんは何かの。まろはもったいぶっておるぞよ。目に見えないものちゃ。そう 意識ちゃ。{何やそんなことか。もったいぶるな — 会長 } せまくいえば意志ちゃ。それが進化を引きおこす源であり 本体なのちゃ。世のうっけどもは人間にしか精神作用がないと思っておるようぢゃがの、みみずだつて おけらだ〜つて あめんぼだ〜つて み〜んな考えておるのちゃ。うっけにはわからぬようぢゃが、まろには聞こえるぞよ。{どんなことを考えているのか一度だけ教えてほしい — 5. 2局長 } 生きとし生けるものどもみな意識あり意志ありなのちゃ。その意志が小さいとき大きいとき 種全体におよぶとき、はたまた生物全体におよぶとき それはおこるのちゃ。{お前、変なことを考えるなよ。お前の意志が“生物全体におよ”んだりしたら、人類絶滅、いや地球が破滅する。君だけ破滅するんならかまわんがね — 会長 } 一つのたとえがあるぞよ。あるところに一人の人がおったそうちゃ。そいつ、ま、男でも女でも良いがの、そいつが人間の、いや自分の愚かさに気づき出家したとするの。まろはこれは進化だと考えるぞよ。{だつたらぐずぐず言っていないで、さっさと“進化したらどうなのよ — 一女性会員 } 小さな進

化ちゃ。彼の、自分はこのままではいかん 愚かさを減ほさねば という意志が、出家という進化を生んだのちゃ。この意志が集合すれば 種全体が同一の意志をもてばどうなるかの。そうちゃ、大進化ちゃ。{ 種の全員が同時に出家したいと思うことなどありえない。故に大進化は起こらない。起こらなくても別にかまわんがの — 会長 } 種が変化するのちゃ。一個体の意志が大きければ大きいほど それは大きくなるぞよ。大きすぎてどーもならんようになることもあるようちゃがの、ほーっほっほっほ。満ち足りることを知らぬたわけは減びるのちゃ、平家みたいなもんちゃの一。} 平家は源家によって減ほされた。減びるのと減ほされるのは違うんやで — 会長 } またまた ある同一の意志が 生きとし生けるすべてのものにおよぶとき 恐いことがおこるぞよ。{ 君の意志でさえなければ大したことはないと思うぞよ — 会長 } . 良いことなら喜ばしいがの。まるには今、四五億とまではいかぬが二九億三千匹ぐらいの生きものが 恐い意志にとりつかれているの見えるのちゃ。{ エイリアンの侵略だ! — 5. 4局長 } もはやまるをもってしても先を読むことはできぬ。手おくれにならぬうちに それを捨ててくれるのを願うのみちゃ。まるは生きとし生けるすべてのものの幸せを願っておるのちゃからの。さてはで、このへんで今日はやめておくかの。まるは出しおしみが大好きちゃからの。{ いっそ完全に出しおしんでくれたら、わけのわからん文章のタイプ打ちという難行苦行から逃れられたのに — 会長 } しかればみんな良い子にしておるのちゃぞ、ほーっほっほっほ、ほーっほっほっほ。おっとそういえば仏陀は 行 (意志) は無常であるとも言っておったのう。{ 何だ、ポットホールの石みたいな話だな — 5. 2局長 } ほーっほっほっほ、ほーっほっほ。

公 家

ほーっほっほっほっ、まろはピーターソンちゃんないぞよ。みんな良い子にしておったかの。まろは息災じゃ。冬じゃのう。まろは冬はきらいちゃ。雪は風流で良いのちゃが、やはり寒いのちゃ。{これは実は昨年のお話です — 会長}まろは寒さはだめなのちゃ。まあこれはどうでもいいがの。さて今日のまろのお話は、なにゆえ恐龍は絶滅したのかということについてちゃ。何、知っておるとな。隕石のせい？ いやいや、そのようなものは全部うそっぱちなのちゃ。うのみにしてはいかんぞ。まろはいったちゃろうて、学者の申すことはみーんなうそっぱちちゃ、と。まろは真実のみ語るぞよ。さて、では始めようかの。ほーっほっほっほっ。

恐 龍 絶 滅 真 (まこと) の姿

うむ、良い題ちゃ。まろは姿という言葉が好きちゃ。なにか美しさというものを感じるのう。日本語というのは実に美しいことばちゃ。{ちょっとうかがいますが、この文章は「日本語」でしたっけ？}毛唐や紅毛のことばは美しさにかけておる。近ごろは毛唐のことばを話せるやからがえらいともてはやされておるがの、まろはちがうと思うぞよ。{先日集中講義を聞きにいった著者は、「日本の税金使って外人の講師を呼ぶな！」と怒って帰ってきました。話を聞いてみると、黒板に英語しか書かなかった、ということでした}もっと自分のことばの美しさに気づくべきちゃと思うぞよ。{美しくなさにも気づいてほしいね}

さてはて、本題に入るかの。恐龍は三疊紀からジュラ・白亜と進化していったのう。前の話でまろは、進化を決めるのは意志であるといったのは、覚えているかの。忘れたなら良く覚えておくことちゃ。では恐龍はどんな意志をもっていたかのう。恐龍は基本的にとんでもないうつけちゃ。きやつらの考えはただひとつ、ひたすらでかく、それしか考えてなかったのちゃ。{金沢大学と一緒だね。おかげで角間の山奥へ行くことになった}そんなもってきやつら、とてつもなくでかくなっていったのちゃ。{ああ美しい日本語！}まあ体力勝負の世界ちゃ。でかいほうが有利なのはあたりまえ、まあゆるしてやろうかの。

でも、うっけゆえの悲しさか、やつらは満ち足りることを知らなかったのちゃ。もう、とうしようもないほどでかくなってしまったのちゃ。そういえば、ちかごろの若いもんはでかいのう。【悪かったな！ぞかくて 一 門脇】 戦で毛唐に負けたのは、体が小さいせいだと思っただけ。ほんでもってあんなにでかくなってしまった。日本人はしょせん恐龍なみというところ。ほーっほっほっほ。

で、恐龍はとんでもなくでかくなっていったと、中には頭からしっぽまで30メートルぐらいになったやつもある。そこでこまったことが起った。しっぽにかみつかれても、の一みそまでとどくのにずいぶん長いことかかり、気づいたときにゃもうしっぽがない、ということが起りはじめた。これはいかんと、きやつらもない知恵しぼって考えた。そしてその結果腰んとこに地方政府といえるの一みそをつくったのちゃ。【学者の言うことはみなうそばちだと言いながら、ここんこはみんな、どこかの大学の助教授の本の受け売りではないか 一 第5編集局長の3、そのどこかの大学の助教授は、「学者」の中にはいないんやろ 一 第5編集局長の2】 まあここは、地方政府というより、労働をつかさどるゆえ、労働者集団とでもいっておこうかの。これは実にうまいこといった。これで恐龍帝国はバンバンちゃ。そして時はとんとんとすぎさり、白亜紀のしまいごろまでやってきた。そのころには労働者集団もただの労働者集団ちゃなくなってきたんちゃ。ちっとはものを考えるようになったのちゃ。そして、の一みその不当な搾取に不満をもつようになったのちゃ。まあ、の一みそはいうならば君主ちゃ。恐龍のばあい、とてつもなくうっけの君主ちゃ。うっけの君主ほどこまったもんはないぞよ。【賢い君主の方がかなわんで 一会長】 まろもしがない公家ちゃ、うっけの天子に使われて、もうこまったもんちゃった。しかも恐龍のばあい、うっけな上に暴君ときておる。そして労働者の集団の不満はどんどんたまり、ふおんな空気がただよってきたのちゃ。時は白亜の最後の日、労働者集団のなかに一人のレーニンが現れた。彼は、労働者を語らい、ついに打倒うっけ殿を旗印に立ち上った。革命だ!! この時はひと昔前にどこぞの国であった革命とはちがい、一國革命ではなく、マルクスにのっとった世界革命が起ったのちゃ。ものすごい、すべての恐龍の労働者どもの一斉蜂起ちゃ。うっけ殿もむかえうつから、もう大変、次々と火の手はあがり、地球中は火のうみ。だが、しょせん両者ともくそみそちゃ。すばやく君主を倒したはいいが、どうやって体を維持したらいいか全く知らぬ労働者、次から次へとパッタパッタ。君主が勝ったとこも、戦に夢中でうっけ殿、心臓を動かすのを忘れてパッタパッタ 一 そして・・・一夜にして大恐龍帝国は崩壊したのちゃ。わずかに残りし者は、満ち足りることを知り、労働者集団をつ

る必要のなかったフニのなかまと、とかげのなかまだけだったのちゃ…… {ヘビと
カメとムカシトカゲを忘れてるよ }

夏草や つわものどもが 夢のあと

わかったかの。これが真の恐龍絶滅の姿なのちゃ。

国破れて山河あり 城春にして草木深し

今は人間どもの天下ちゃ。これも恐龍どもと同じ運命をたどらねば良いと、まろは切に思
うぞよ。

ではこのあたりでまろの話は終りちゃ。また会う時まで {もう会いたくない} みな良い
子にしておるのちゃぞ。ほーっほっほっほっ。

時 事 放 談

司 会 さて、91年新春を迎えて、皆様に日本、そして世界の現在と未来を考えていただきたいと思います。御出席の皆様はおなじみ、八っつあん、熊さん、御隠居さんの御三方です。

八 わしが八だす。

熊 おらあ熊だじょ。

隠 わたじが御隠居だがね。

司 一応御紹介もすんで本題に入るわけですが、まず中東問題についてどう思われますか。

八 そういわれてもねえ、今日（1月9日）の時点でジュネーブ会議やってるわけだし、この学会誌が出るころには一応の結果が出ちゃってるしなあ。

隠 まあまあ、そういう時事的な話題はともかく、〔「時事」放談とちがうんか 一 会長〕 今回のクウエート問題の裏にあるアラブ社会の問題点について探ろうという事じゃよ。

熊 でも会長がそんなような事書いてましたよ。

隠 あちらはあちら、こっちはこっちじゃ。〔オレは「隠居」じゃないもんな〕
そういえば八っつあんは正月前アラブに関する本を図書館で探しまわって
って話じゃないか。

八 いやいや、角間の図書館は腐ってますからねえ。何もありませんでしたよ。

熊 そのわりにはおまえさん、ずいぶん一研まで出かけて行って口きいてるそうじゃねえかよ。

八 こらこら、だれの話をしてるんだよ。俺は「謎の経済学部生 M君」じゃないぞ。

熊 じゃあ何で「長屋の八公」が角間なんか行くんだよ。

八 ゲエッ、痛い所をつかれたぜ。まったく何も考えないで書き始めるからこんな事になるんだ。

隠 おいおい、誰に言ってるんだい。それはともかく、その席った角間にも多少は収
穫があったそうじゃないか。

八 他に本屋なんかも行ったんだけど、学問的にアラブ社会を分析する本はほとんど
なくて、ビジネスの相手としてのアラブを解説するといったものが多いですね。

熊 あれだけ西ヨーロッパ社会に関する本は多いのにね、やっぱり日本人は西洋指向
なのかな。

{ ここまでタイプした時、アメリカがイラクを攻撃した。時に1991年1月17日午前
8時30分 }

八 特に角間の図書館はひどいね。ラテンアメリカや中東の本なんかありゃしない。
何でも例の M君がリクエストした「ラテンアメリカの文学」っていう全集物が「
スペイン文学」の棚に並んでいたそうですからね。ブラジル人の作品もあるって
いうのに。

(注:「角間」というのは金沢大学の移転先です。現在、法・経・文の3学部だけ移
転し、山奥の不自由な生活を強制されています。一研へ来る学生の中でただ1人角
間の住人である彼は、恨みをいだいているというわけです — 会長)

熊 中国以外のアジアに関する本なんかないものね。朝鮮半島の政治・経済状況に関
する本は多少あるけど、こと文学に限っていえば、金芝河が2冊くらいあるだけ
だもの。隣の国なのにね。

隠 まあまあ、2人とも、リクエストした本がまるっきり無視されて怒ってるのはわ
かるけど、ここは図書館の苦情受付じゃないんだから。

熊 何を言っても無駄でしょうけどね。

八 何しろ米飯を椀でなく皿に盛ってしまう大学だからなあ。

隠 まあまあ、あれは一応最近増えてきた留学生対策ということらしいぞ。

熊 それだったら椀と皿が選択できるようにすべきですよ。

八 だいたい飯を皿に盛るのは不合理ですよ。さめやすいし箸で食べにくい。M君の
指導教官である O教授も怒ってましたよ。

隠 O先生は兼業農家だからな。あの家で飯食うとうまいぞ。(ここまで言っはた
と思ひ出し) ちょっと待ってよ、これは生協食堂に文句を言うコーナーではなか
ったはずじゃぞ。中東問題はどうなったんじゃ。

熊 もういいじゃないですか。どうせこれが印刷されるころには、どうにかなってる

って。

隠 そういう事じゃないって言っとるだろうが。

八 何でも最近 M君はリトアニア情勢の方に興味があって、クウエートの方はどうでもいいらしいぞ。

熊 どうでもいいってのは言いすぎだって。

隠 まったくこれじゃあまるっきり企画倒れじゃないか。これだからこの男はあてにならないんだ。

八 御隠居さん、誰に向かって言ってるんですか。(ここでいいかげんこのネタも思切れたなあ、と作者思いつつ次の話題へ) { まだ何も言ってないじゃないか — 会長 }

司会 さて、このあたりで話題を変えましょう。御三方とも相当の映画ファンだそうですが、90年に見た映画でこれと思う1本を挙げていただきまして、その上でこれからの日本映画について語っていただきたいと思います。

隠 そうじゃな。邦画では「宇宙の法則」、外国ものでは「恋愛風塵」がよかったのお。

熊 私も「宇宙の法則」はよかったと思いますよ。外国物は「今を生きる」ですね。

八 邦画なら「二十世紀少年読本」、あちらものでは「マイ・レフト・フット」かな。

隠 90年てのは、産業としての映画のあり方が問われた年だと言えそうじゃな。と言えれば某本屋の映画の事だとだいたい想像がつくじゃろ。あの男、何と言ったかな、角川 博、じゃない村上春樹、そうそうこの2人を足して2で割ったような名前じゃったのお。こやつはもっと賢い奴だと思っておったが、やはりしょせんは富山県人、浅はかじゃったな。

八 おっと御隠居さん、ずいぶん大胆な発言ですね。O先生も富山県人ですけど、いいんですか、そんな事言って。

隠 大丈夫じゃて、これは匿名じゃからわかりゃせんよ。

八 もう十分ばれてると思いますかねえ。何せ O先生のゼミ生で頭文字が M の4年生は一人だけですよ。

隠 そう気になさんな。O先生だって変な学生はとっとと卒業させたいはずじゃ。

八 それじゃまるで理学部にいる O先生と同じじゃありませんか。(理学部の O先生はオレだけじゃないよ — 会長)

隠 おいおい、それでは経済の方の O先生に対して失礼じゃないか。会計学演習の単

位が出なかったらどうする。〔理学部のO先生が一言口をきけば、卒業も就職もつぶれる、という事実を知らんなー会長〕

八 大丈夫ですって。O先生だって変な学生は早く出てってもらいたいと思ってますよ。〔同感！ー理学部の先生〕

熊 こらこら、話がループしてるぞ。ところで、映画の有料入場者が減ってきている、特に邦画の場合著しいですが、これはやはりビデオのせいだと思いますか。

八 そう思うね。半年ちょっと待てば、3本1000円で見れるんだぜ。よっぽどスクリーンで見たいと思わせる映画じゃないと、映画館行かないよ。

隠 製作側の方も最近では、ビデオ化されてからが勝負だと思っている感じがあるからな。昔、大森一樹の「暗くなるまで待てない！」なんてものがあつたけど、今じゃビデオになるまで待ってしまうというわけじゃな。

熊 でもそれは、そういうシステムができあがったから、というよりも、フィルムに魅力がないから映画館に行かないわけでしょ。でも本当に日本映画ってつまんなくなつたのかなあ。

八 おもしろいものはたしかにあるけど、つまらんものが多すぎるね。まず脚本が悪い、監督が素人同然、しかも役者がへたくそとくれば、おもしろいわけがない。だいたいテレビや雑誌で文句ばかり言ってる監督のものに限って、つまらんね。
(原田真人！ てめえのことだよ)

熊 日本映画が嫌いって言う人の意見は、たいていが暗い、安っぽっていう所でしょ。でも最近は結構金かけてる映画も多いよね、どうして画面が安っぽくなっちゃうのかな。

隠 金の使い方がまちがとるからじゃよ。例えば例の本屋の映画じゃが(以下、K川映画の悪口が続くが、削除)・・・とまあ、つまりそういうことじゃ。

熊 何がそういうことなのか、さっぱりわかりませんよ。

隠 まあまあ、いいかげんみんな疲れてきたんだから。〔いちばん疲れてんのはタイプ打ってるオレだよーじゃ、いらんこと打たなきゃいいじゃないですかー熊と八ーまあまあ、いらんこと言わんとー隠居ーてめえら、いいかげんにせえよー会長〕

隠 それにしても、作品としての評価はともかく、黒沢が映画とる時は、「乱」の時はフランス、「夢」の時はアメリカの金がないとできないっていうのに、本屋の

つくるつまらん映画にはあんなに金が集まってしまうとは、一体どうなるとるんじゃ。

熊 御隠居さん、それがバブル経済って奴ですよ。（やっとなんて経済学部らしくなってきたぞ、と作者は思いつつ）カジノ資本主義のあだ花が咲きほこって、もうかる会社は大もうけ、損した会社はつぶれていったわけですよ。そこにとってつけたように、「これからは企業の文化戦略が大事だ」なんて、セゾングループか東急の言い出しそうな話が広まったわけです。ところが日本の会社ってのは、芸術オンチだからどこに金を使ってよいかわからない。しかも、金出してやったんだから少しは見返りも、という調子だ。日本企業ってのは、投資はできてもパトロンにはなれないんですよ。要するに発想が貧乏くさいんですなあ。〔余談ですがこの作者は常々自分のことを、貧乏だ貧乏だ、とっております — 会長〕 だから本当に価値のあるもの、実力のある人間がわからんのですよ。

八 だから金をかければかけるほど貧乏くさくなるというわけか。本当かいな。〔本当だよ。研究だって金をかければかけるほど、なかみは貧困になっていく。経済的貧困にはまだよい所もあるけれど、精神的貧困にはつける薬がない — 会長〕

隠 そういえば、昔の A T G やにっかつの、たいして金のかかっとなん映画は、意外ときちんとできとったな。

熊 どうせ金かけるなら、カナダで侍が合戦する、なんてつまらんことにじゃなくて俳優や脚本家を育成していく事に使われなくっちゃ。

八 そういえば、名前忘れたけど中国の女優さんが、日本人は学校も出ないで演技ができるなんて天才ですね、って言ってたよ。

熊 あんまり下手なんでバカにされてんだよ。

隠 大学の演劇科出ればいい、ってもんでもないじゃろうけどな。

司会 そろそろ作者も、疲れた、とっておりますので、このあたりでおひらきとしますが〔ありがとう！〕、最後にこれから期待される監督、脚本家その他挙げていただきたいと思います。〔いらんこと言うな！ まだ打たす気か〕

隠 監督では金子修介がおもしろそうじゃな。一色伸幸は才能あるライターだと思うのじゃが、あまりホイチョイ路線〔何のことじゃ？〕に走らぬ事じゃ。

熊 中原 俊 ですね、この人は女を撮らせたら天下一品じゃないかな。あと、私の叔父夫婦の仲人ということで〔汚職だ！〕木村威夫大先生が美術を担当してい

るものは要チェックですね。

八 大林宣彦、と言いたい所だけど、いつまでもこの人に頼っていても面白くないので、これからの注目は長崎俊一としておきましょう。脚本は筒井ともみかな、正月のテレビもおもしろかったし。

司会 今日は皆様、どうもありがとうございました。(ここで3人、軽く会釈)

E N D

というわけで、何が時事放談なんだか、まるっきり構成力というものが欠除してますね。よくこれで、「将来の夢は？」とか言われて、「シナリオ・ライター」なんて言ってたもんだぜ。【その道はあきらめたんやろな - 会長】大昔の話ながら恥しいもんだ。と、M氏、いつものように、一人言を言いながら筆を置くのでした。(何のこっちゃ)

◎ 編集局より

アメリカによるイラク攻撃がはじまった今、「作者」は本題の中東問題について深い深い考察を開始したものと思います。次号でその深遠な思索の一端を紹介してもらう予定ですので、乞御期待!

じえいたい (自衛隊)

1. 自 (みずから) を衛 (まも) る軍隊。

自衛隊は、その軍事力によって、自衛隊自身を守る。

2. 自衛隊は、一部の日本人を守る。

自衛隊 (軍隊) は、高級軍人、政府の要人、経済界の大物、大企業等を守るためにある。第二次大戦の末期に、関東軍が一般庶民を見捨てたように、もしあなたが庶民の一人であるなら、いざという時自衛隊はあなたを守ってくれない。

3. 自衛隊は、日本人を殺す。

軍隊の殺人能力は必ずしも敵に向けられるばかりでなく、しばしば無抵抗の自国民にも向けられる。日本軍がたくさんの沖縄の人々を殺したように、天安門で中国軍が学生を殺したように。自分の払った税金によって雇われた自衛隊によって、いつあなたも殺されるかも知れない。

編集者への手紙

はじめまして。

私は、研究室において某不名誉会員より貴学会誌を紹介されて以来、そのとりこになってしまい、時折暇をみては（もしくは、暇を授業に優先させては）パラパラとページをめくり、うなずきと笑いを禁じ得ない【ああ、この人はもうだめだ — 5局長その1】毎日を送っております。

ところが、幸か不幸か、来3月にはめでたく卒業する予定となっており、【うらやましいね。うちのどうしようもない5人の5局長は、みんな残りよる — 会長】その後は日本生物学会誌をおいそれと読むことができない、という事実、ある日はたと気がついたのです。

そこでお伺いしますが、貴学会への入会は、今でも受け付けられているのでしょうか。もしいるとすれば、入会規定等の変更は行われていませんか。最新号に載、どうやら入会についての記述が見当たらないのですが。

お忙しいところ【ちっとも忙がしくないよ — 5局長その2】【人の忙しさを勝手に決めるな — 会長】恐縮ですが、以上のこと、お返事いただければうれしく存じます。

では、益々のご繁栄を祈りつつも、早々に失礼。【生物学会そのものから早
早に失礼した方がよいと思うぞよ — 5局長その3】

※ 会長の返事 ※

いちいち手紙のやりとりするのは面倒なので、入会されたことにします。【独裁権力の発動だ！ 断呼抗議する — 5局長その4】【だって会長は独裁を宣言してるんだからしょうがないよ — 5局長その5】【独裁者だからといって、文句つけたらいかんことないやろ — 5局長その1】【文句つけてもええけど、だれか言い負かす自信あるか — 5局長その5】【ないなあ — 5局長一同】89年度分会費100円お送り下さい。就職されるのでしたら、来年からは1000円になります。

100円払って学会誌をごっそりもらい、就職して行方をくらませる学生がちょいちょいいます。【なるほど、そんな手があったか — 5局長その4】こういう人は出世はするでしょうが、立派な人物にはなれません。もっとも、ずっと会員でいても、立派な人物になれるという保障は全くありません。出世できないという保障は完璧です。【これでも入会するという奴はバカだね 5局長その3。】【お前もはいつてるやないか — 5局長その1】

読んで喜んでいるだけでなく、何か書いて他人を喜ばせることにも心がけて下さい。

某不名誉会員によろしく。

「日本生物学会誌」全号送付していただきまして、どうもありがとうございました。改めて1号より読み直させていただきます。

今は、卒業の為の論文書きで忙しいのですが【君らもちょっと見ならえ — 会長】（厳密に言うと、まだ一語も書いていないので、「論文考え」ですが…）、【「論文考え」ならやってるよな — 一同「ウン」】ヒマができましたら何か書いて送りたいと思いますのでその節にはよろしくお願いします。

◎ 大変長らく行方不明になっていた「編集者への手紙」とそれへの返事

はじめまして。この学会誌をいつもおもしろおかしく読ませていただいております。わたくしめの性格にまさしくぴったりかんかんの読み物です。18才のピチピチギャルではありますが、普通の人とは少しばかり違ってこういった学会誌のような雰囲気はたまらなく好きなんです。今回、はじめてここにお手紙を出す訳ですが、実はネタがない。しかし、何かしら言いたいことというのはあるだろう。

そこで、わたしが前々から思っていたテーマをぜひ会長様にも考えてもらいたいと思いたったのです。

テーマ・～人間とは何か？～

ついこの間といっても5月の19日のこと。わたしは、友達とある喫茶店に入ってお茶を飲みながら、

友：「〇〇さん（これ私の名前）、人間とは何か考えたことある？」

私：「ん～。正直なところ考えたことない。」

そこで、わたしはその友達に、

私：「じゃあ、そちらさんの意見とやらを聞かせてもらいましょう。」

とって、聞きました。

友：「人間とは、ルートの中の小数点みたいなものだと思うんだ。つまり、人間って

不完全ということを言いたいんだろうけど。でも、そうじゃなくて、人間って何かこう法律とか規則とかで囲まれている、いわゆるおりの中でなくては生きていられない動物なんだ。その法律とか規則がルートなんだと思うね。」

私：「ふーん。じゃあ、小数点というのが人間の不完全さを表している訳なんだ。」

友：「そう。橋場さんはどう思う？」

私：「ん～。人間ってさ、不完全とかそういう言い方もできるけど、なんて言うかわたしなら人間の心理とか感情面にすごく興味あるなあ。感情があるから不完全だと思うしね。たしかにルートは必要だと思う。人間はひとりじゃないからね集団で生きている以上規則は必要ね。でも、どうして、人間が人間とは何かって思うんだろう。わたし、不思議でたまらない。」

友：「う～ん。自分たち人間でさえ人間のことがわからないんだから不完全なんだねきっと。」

私：「うん、納得。でも、これを生物学的に考えるとどうなるのかしら？人間とは、直立歩行でうんぬん・・・っていう答えになるかな。」

友：「じゃあ、橋場さんの知っている日本生物学会誌とやらにこのことを送って、その会長さんのユーモアあふれるお答えを聞いたら？」

私：「それはいい。」

と、いうことでここに出した訳なんです。どうでしょうか？

もし、お答えして下さるのでしたら、ぜひわたし宛てに会長様のお手紙を送っていただけませんか？会長様のお手紙をこの目でしっかり見て、新しい考えが浮かんだらこの会誌にちゃんと”論文”として再度送りたいと思いますので。

どうかこんなわたくしめにささやかな愛の手を・・・・・・・・

お手紙お待ちしております。

5.局長：会長！ こんな手紙、ずっと放っといて、無責任ですよ、まったく。どうしてくれるんですか！

会長：どうしてくれるって、忘れたものは仕様ないじゃないか。君も知ってるやろ、あのいったんはいったが最後、2度と出てこん、生物学会の魂の引き出し。

5局長：そんなの、会長が入れて忘れるだけやないですか。

会 長：相手が「18才のピチピチギャルだからといって、そうむきになるなほ。あんまり長いこと忘れていたから、もうおばさんになってるかも知れんぞ。

5局長：そんな無茶な。せいせい20才くらいですよ。ともかく返事して下さい。

会 長：こんなの、どうや。（書類や本が乱雑に積み上げられた机の上から1冊とり上げてバラバラとめくり、読みはじめる）「人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鎖につながれている。自分が他人の主人であると思っているようなものも、実はその人々以上にドレイなのだ。どうしてこの変化が生じたのか？ わたしは知らない。何がそれを正当なものとしうるのか？ わたしはこの問題は解きうると信じる」。

5局長：何ですか、それは。いつもとちがって、やけに難しいですね。

会 長：たまには格調の高いところも見せとかんとなあ。これでも大学の先生なんやから。

5局長：それはいいけど、解説して下さい。

会 長：人間は本来自由やけど、ルートがかかって不自由になった、ということや。

5局長：何や、それやったら、手紙に書いてあることと同じやないですか。

会 長：はじめからルートがかかってるんでなくて、いつかルートがかけられた、というところがちがうんや。次行くぞ。「もし、わたしが力しか、またそこから出てくる結果しか、考えに入れないとすれば、わたしは次のようにいうだろう。——ある人民が服従を強いられ、また服従している間は、それもよろしい。人民がクビキをふりほどくことができ、またそれをふりほどくことが早ければ早いほど、なおよろしい。なぜなら、そのとき人民は、（支配者が）人民の自由をうばったその同じ権利によって、自分の自由を回復するのであって、人民は自由をとり戻す資格をあたえられるか、それとも人民から自由をうばう資格はもともとなかったということになるか、どちらかだから。」

5局長：頭が痛くなってきた。いらんこといわなきゃよかったな。

会 長：フツフツいわんと、少しは考えてみい。だれかがルートをかけた。みんながそのルートでよいと甘んじていたら、それでよい。平和だもんね。でも、いやだと思ったら、一刻も早くルートをはずせばよい。ルートをかけた奴に権利があるんなら、かけられた奴にも同じ権利があるはずで、はずすことは正当だ、という意味みたいだね。

5局長：それならわかります。なんで学者はこう難しく言うんですかねえ。

会 長：難しく言うから学者なんやないか。原因と結果をとりちがえてはいけない。

5局長：???

会 長：もうちょっと読もう。「しかし、社会秩序はすべての他の権利の基礎となる神聖な権利である。しかしながら、この権利は自然から由来するものではない。それはだから約束にもとづくものである。これらの約束がどんなものであるかを知ることが問題なのだ」

5局長：ここはわかりますよ。ルートというのは、人間本来のものでなくて、単なる約束だというんでしょう。

会 長：いいぞ、その通り。

5局長：そういえば、日本生物学会にも会長独裁というルートがかかっていますね。これも単なる約束ですか。

会 長：オレが独裁を宣言、というらん方がええよというてるのにはいったんやから、君の方が約束を守る義務がある。

5局長：でも、会員には「クビキをふりほどく」権利もあるんでしょう。

会 長：大いにあるよ。何ならいますぐ、君に会長職をゆずろうか。

5局長：……いや、それだけは止めときます。

(あとで、会長が引用した本を見たら、ジャン・ジャック・ルソーの「社会契約論」でした。

(桑原・前川訳、岩波文庫) 第一編第一章(15ページ)のほぼ全文です。ちょうど読んでいたところで、これ幸いと引用したのでしょう。忠告しておきますが、読んでみようなどという気は起こさない方が賢明です。会長だって、しおりのはいっていたところは、そのわずか5ページ後なんですから — 5局長)

前号で、「5局長だから5人にやらすことにしようかと思う」と書いたら、まだ任命しないうちに、その1からその5まで、5人が第5編集局長を自称してしまった。私はまだ公認していないから、みんなまだ“もぐり”である。にもかかわらず、本誌のあちこちに出没している。当分本誌の格調も低下しそうだが、1～2年のうちにはみんな出ていくだろうから、しばらくしんぼうして付き合っていてやっていただきたい。【会長も甘いね。そう簡単には出て行かないよ — 5局長一同】

◎ 第5編集局長その3 宣言

ほーほっほっほっ まろはピーターソンちゃんいぞよ、高貴な公家でおちやるぞ。このたびまろは、某会長よりせひにとたのまれての、第5編集局長その3になってやったぞよ。みやびな生活にも、もうあきあきしたての、たまにはさびれた所もよいものちゃ、なんといってもまろは、興ゆかしいからの、ほーっほっほっほっ。なにやら会長君がまろの歓迎と申して、某料亭にて大演会【カラオケでもやるんか — 会長】を学会のクリコシ金でやってくれるそうちゃ、ま、まろのみやびな生活にはおよびもつかぬがの、ほーっほっほっほっ、これはハヤトピーターソンちゃんいぞよ。でもまろも何もせずに喜んでもらうのは好きではないからの、一つアナクシマンドロス3でも書いてもらひにいつてくるかの。何といってもまろは高貴の出ちゃからの、下品な文はまろとは無縁なのちゃほーっほっほっほっ。それでは次号までみな良い子にしておるのちゃぞ、ほーっほっほっほっ。

(漢字、かな使いは原文のままです)

◎ ゆうぐれにひとをまつそらはますますくらくなりかみなりがなりひびく ねむい
あまだれの音をきくストーブのひはますますあかみをます ねむい ぼくはコートに身をつ
つみ

(1行削除)

けっ くだらねえ ねむい へへっへっ

(5局長その4・・・らしい)

◎ 学会誌もこれだけ長らく出さないと、会長であることを忘れてしまう。それを思い出させてくれる不ラチな奴が時々いて、ぼつりぼつりと原稿を送ってくる。いつの間にか1号分をオーバーして、少々あわてるはめになった。

◎ たてつけに2号出して、たまった原稿を片づけようと思ったが、2号分にはとうてい足りない。そこで私が書きはじめたのだが、これがまた長くなって、2号分をはみ出してしまった。こうなれば仕様がな。いま、3号分の原稿を着々と用意しつつある。

◎ 10数年前、胃の手術をした後急に元気になった私に、息子が言った。「お父さん、ロウソクの火は、消える前に一度、明るく燃え上るらしいで」つつけて3号も出すようでは、日本生物学会も先が短いかも知れない。

◎ 学会誌が一向に出ないのに、毎年会費を送ってくる律気な人がいる。こんな真面目な人は長生きできないのじゃないかと、秘かに心配している。「会計報告」をごらんになったらわかるように（と、いって、まだできていないのだが）、学会財政は、日本経済同様、かつてない好況に見舞われている。もっとも、会誌を出さなければ一円も使わないので、たまって当たり前なのだが。

◎ あまりもうけると、日本と同じく、世界の孤児となる。そこで、余った金を使い切るまで、会費はすべて免除することにした。それでも送ってくる人がいたら、除名することに決めたから、用心していただきたい。まあ、円満に退会したい方は、この際、たくさん会費を送ってもらってもよい。

(会 長)

会 計 報 告

1989年4月 ~ 1991年3月

収 入		
100円会員	21人	2100円
1000円会員	58人	53000円
2000円会員	18人	36000円
前年度くりこし		67600円
計		158700円

支 出		
上質紙	5000枚×2円	10000円
表紙	500枚×3円	1500円
ファクス原紙	24枚×70円	1680円
印刷インキ	1本×900円	900円
送料	第27号分	25000円
計		39080円

差 引 次年度くりこし 119720円

監 査 報 告

早く辞めたいよ。

日本生物学会誌会計監査 夢 穂 忍次郎 印

日本生物学会誌 第28号 1991年7月31日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載